

研究ノト

平林英子論

腰原哲朗

平林英子論

腰原哲朗

序

長野県に縁のある小説を中心とする女性作家ということでは島崎藤村の「処女地」を舞台に南佐久の松原湖畔で活動した『鷹野つぎ・人と文学』東栄蔵編著また飯田市出身で「女人文芸」を舞台に活動した『横田文子・人と作品』東栄蔵編著などが浮かぶ。同著『横田文子』の冒頭には旧満州から文子が中谷英子にあてた便りが掲げられている。本稿でとりあげるのはその中谷英子（本名平林英子）で平林たい子とは別人である。

なぜとりあげるかといえば三女性とも家庭をもった主婦と作家という二足のワラジをはいた地味な文学活動をした人たちであって、いわゆる文学と実生活論争、ジェンダー論をふくむ問題に示唆をあたえると思うからである。

南枝北枝

平林英子の第一創作集『南枝北枝』は一九四〇年（昭和一五）新ぐろりあ叢書の一冊として、夫である中谷孝雄の小説集『むかしの歌』とともに刊行された。六編の小説集で装幀は棟方志功、英子の作品も柳宗悦の民芸調で、苦学独学の点でも英子と志功は共通するからふさわしい装幀である。「あとがき」によれば二〇編に近い作品のなかから選んでまとめたもので、もっとも初期の作品は「女人文芸」に発表した「山の幸」という。

「女人芸術」を本屋で見て、夫の中谷孝雄には内緒で送った「谷間の村落」が長谷川時雨により翌月の一九三〇年（昭和五）四月号に掲載され作家への一步をふみだした。貧しい山村の現実を描きだした「谷間の村落」と同様「山の幸」も平林英子が一六歳まで過ごした梓川村が舞台である。梓川にそって東西にのびるこの村は現在松本市となったが、英子が生まれ育った地区は、北アルプスの麓に位置する上高地の入口ともいえる山里である。「山の幸」は春夏秋冬のタイトルをつけて、山里の風物生活を回想して描く。「春」では炭焼仕事を終えた山男が、煙草代を求めて鶏小屋の卵をあてにする。おりしも娘二人が製糸工場へ稼ぎに行くところなので、せめてもの夕食にと沢蟹をとりでかける。

昔から、村の人々は、山中を駆けづり廻つて、自然の中から食物をあさる方法しか知らなかつた。人間に追はれて山奥へその生存区域をせばめて行つた熊や猿のやうに、文明のサーチライトに追はれて、益々生活方法を消極的にして行くより仕方がなかつたのだ。

「さうだ、よし、これから蟹を堀に行つて来よう」

「蟹つて、蟹はまだ早いづらに——」

「なあに、早いことがあるもんか、大丈夫とも」

彼はかるさんをはいて、鍬とバケツを下げて家を出た。

「夏」では養蚕の光景が描かれる。女房は借金取を追い返し、夫は畑で小さい子イモを、早くから堀るのはもつたない、と近所の人に言われながら堀る。

「冗談ぢやねえづら、まだ小さい子薯ぢやねえか、もつたない事をするもんだ」

だが、彼女はそれ以上深く詮索することもせず、しばらく世間話などを喋ると、まもなく向ふへ行つてしまつた。彼はほつとして、泥棒でもするやうに大急ぎで後を掘りつづけた。貧乏すると、自分で作つた芋を堀るのにも氣がひける。彼は堀跡の新しい土を目立たないやうに地ならしをしなければならなかつた。

「秋」では繭の収入により神酒みきにありつけるが、肴がないので月夜の河原に行き芦の中あしにいるツバメをねらう。梓川に身投げした独身だった女荷馬車屋をしのびながら。

「お父つさま達が、燕をとつてきたなんて、誰にもいふんぢやねえぞ……」

古ぼけた柱時計が十時を打つた。

大策の周圍に寄りそつて、彼等は小鳥の毛をむしり始めた。

度しい祝宴の準備が頑固な沈黙のうちに進められていつた。

「冬」では、炭焼を生業とするから早朝に家を出る。スキーとリュックサックを負つた人々の姿を別人種のように眺めながら「雪の降るたんびに、仕事が出来ねえで困ると思ふに、こんないけすかねえ雪が珍らしくて、銭を使つてすべりに来る人間もあるだてなあ」とつぶやく。炭焼の原木も、金貸しをしている議員に払い下げになつた官林の残りを借りてのことで、一俵の炭に二割の返済金をそえることになる。

小學校を出た年始めて父親に連れられて、炭焼きに来た時の自分の姿を想ひ出した。軽く詰めた半俵の炭俵を背負つて、迂り落ちさうな崖路を歩いた時、膝から下が妙に震へて、體中の神経が足の先を集つた様な氣がした。そして、高等科へ通ふ友人

達の事を考へたら、涙がわけもなく頬を傳つた。翌年の夏、父は官林の伐採の折、誤つて大木の下になつて死んでしまつた。

長く引用したのはは作品にふれにくい事情を考慮してのことである。この「山の幸」から一〇年後に書かれた書名と同じ「南枝北枝」という作品になると、農民文学的な素朴なリズムから脱して、虚構性をきかせた小説に転じている。

「南枝北枝」は開業医を舞台として恋情をモチーフとしたオーソドックスな短編である。個人開業医師は往診にかこつけて妾宅へ通う。つきそう看護婦にまで疑いの目をむける医師の妻は、見習看護師である民子にまであたる。親戚の医学生が手伝いにくるにおよび、民子との間に恋情が生じる。しかし医学生は神経衰弱になり自殺らしい死に方をする。民子は木犀の木の下に佇んで、医学生を偲ぶところでこの作品は終る、そのラストシーン。

「北枝の花」

民子はふとそんな言葉を呟いて目をつむつた。ひときは花の匂ひが強く、胸に流れて、彼女はたゞたゞ生きたいといふ、激しい慾望を感じるばかりだつた。

目をひらくと、陽を受けた南の枝は豊かに、まばゆく輝いてゐた。

小説というジャンルが得意とする三角関係のアヴァンチュールに手を染めたこの作品には、背後に英子が参加した「新しき村」体験があると思われる。長野県下の教育を中心に「白樺」派を支えた歴史は赤羽王郎や児童文学の塚原健二郎の「新しき村」参加などにみられるように盛んだつたから、英子の純心な感性も刺激された。平林英子は一九二二年（大正一一）秋に宮崎県日向村へおもむく。

二〇歳のときである。

新しき村と青空グループ

平林英子は京都大学生だつた中谷孝雄との同棲生活を中断し、親族の反対をおしきつて梓川村から出発する。もともと梓川村は明治期に「文庫」派の中心人物の一人中澤水鳥（本名伝）が出、大正期に入つても、若者中心に白樺を中心とする進取の気運がつよかつた土地がらである。けれども世間的には白樺派に対する疑懼の念は強かつたから、両親の反対は当然であり勇氣のいる決断であつた。途中京都に下車して中谷孝雄と会い、日向村へ向かう。武者小路実篤の多くの著作のなかの一つ「人間の生活」（一九一一刊・大阪での講演を速記したもの）で理想的な労働と新しき村の賛美を言う言説にひかれての参加であつたが、半年弱の参加となつた。滞在が短期間で終つた最大の理由が、実篤のアヴァンチュールにあつた。

なにしろ「新しき村」は様々な経歴をもつ個性的で自我の強い若者の集団だつたから、自由恋愛は複雑な様相をていした。実篤の最初の妻房子をとりまく恋の狂想曲ともいうべき集団に、英子が距離をおき離れたのは、苦勞人らしい冷静な決断だつた。阪田寛夫『武者小路房子の場合』で老いた白猿と記され九七歳で逝く房子と、中谷孝雄と七〇年におよぶ生涯をともにして堅実な作家生活を終える英子とは対照的である。

フィクショナルな「南枝北枝」のような短編に達したのは「新しき村」体験のほか梶井基次郎や大宅壮一や三好達治らが出した

「青空」グループとの接触が大きい。文学談義を聞きながら知識を高めていくようすは、平林英子『青空の人たち』や中谷孝雄の小説集『招魂の賦』にうかがわれる。

やがて同人仲間で資産家の淀野隆三がプロレタリア文学へ本格的に入っていったように、当時の流行ともいえる潮流にそって英子も左傾する。もともと英子がプロレタリア文学にひかれるのには、それなりの必然性があった。

梓川村の生家は、親の天理教への寄進や保証人による損失、それに加えて家全焼などが重なって没落、進学を断念して新聞をみて一六歳で大阪に出、塾住み込みや電気会社で働き、大震災のころは、長野新聞社で記者として活動するという苦難の道から、社会の矛盾を痛感してきたからである。そうした遍歴は信濃毎日新聞社『来し方の記5』や岡田孝子『風に向かった女たち』（聞き書き）にくわしい。

「ナツプ」から戦後へ

日本プロレタリア作家同盟（ナツプ）に松田解子に誘われて加入したときの気持を「プロレタリアの生活、感情なんかを小説にしたかったの、チェーホフのようなね」（聞き書き）と語っている。マルキシズム（理論）の方からでなく、生活実感としての参加であるから、作品もそうした事情を反映している。このナツプ時代の作を『日本プロレタリア文学集・婦人作家集3』でみると「模範工場」など五編が収録されている。

そのなかの「消え残る生活」（「女人芸術」／一九三〇・七月）と

いう作品は、先に引いた「山の幸」に酷似する。「春夏秋冬」のタイトルは「(一)」「(六)」に構成され直してあるものの、かなりの部分が類似する。類似するとはいってもナツプの影響は色濃く、同『作家集3』の佐藤静夫の解説は次のようだ。「平林英子の「消え残る生活」にも、貧窮する農村と小作組合結成が描かれているが、この作者の「発端」には紡績工場で闘争に立ち上がる労働者の姿が、作末尾に熱っぽい筆で描かれている。一職工の負傷の問題に端を発し、不況を口実に誠首を企図する会社に先手を打ち、全職工の要求をまとめてこれを提出し、拒否されると力強い示威行動に移る、その労働者たちの姿は、これに合流する女主人公の感動として次のように描かれる。

「二人の人間の不幸が、こうして五百人の仲間を動員する。自己の力に目醒めた階級の壮烈な行進曲。」

そして「模範工場」には、「工賃はぐんぐん下落するばかり」で「お粥もすすれない失業者が、千人近くも」云々。このように「ナツプ・コップ」理論に導かれた型通りの作品であるが、それでも「育くむもの」（「婦人文芸」一九三四・八）が比較的すぐれた完成度をみせている。耳学問的にせよ「青空」グループからの感化と、プロレタリア理論からの影響が重なって作品を重厚なものにしている。

「育くむもの」は家賃滞納で家を追われ、電車賃にも苦勞する主婦民子が主人公である。子ども二人を育てながら政治運動にも加わる。ところで夫の方は、や、芸術至上主義的な無名作家で、創作にいらだち神経をとがらせるから夫婦の確執が続く。その間をぬって民子は婦人委員会とかサークルに参加し、プチブルとか弁証法的統一とかを仲間で論じ、思想を育くんでいく。その結果、夫も社会主

義思想へ誘いこもうと努力する。「弾圧」の語は伏字である。そうした場面の一部を引用する。

玄関を出かけようとしていると、母親の身に起ったただごとでない様子を感じたのか、正二が突然「母ちゃん！」と叫んで激しく泣きだした。

「母ちゃん直ぐかえるから、おとなしく待っていらっしやい」

男たちは、逃げるようにどんどん急ぎ出した。そして、正二の泣声が聞こえない処までくると、背の高い方が民子の顔をにらむようにして言った。

「子供のある女は、社会運動だけはよせよ、子供を可愛いと思わんのか」

民子は心の中で、この男にも子供があるのだなと思いつながら、埃の舞いたつ乾いた道を乱暴に歩いた。

この『婦人作家集3』には、木曾出身の八木秋子の小説「柿をもってきた父」が収められている。「八木秋子著作集」にも収録されているが、秋子の場合小説よりもアナキズムの立場にたつ評論が中心である。著作集にみられるように「種蒔く人」に発表した婦人解放論や林芙美子との交流など雑多に乱筆した。生活苦もあってアナキストにありがちな文章の荒れが目立つものの、藤森成吉とかわしたアナ・ボル論議は話題となり、秋子の存在感を高めた。波瀾にみちた生涯は、杉山直『八木家の娘たち——自立への道程』（私家版）や、望月武夫「八木あきの軌跡」（『安曇野文芸』連載）にくわしい。

平林英子の戦後の活動は五篇をおさめる『夜明けの風』（一九七三刊）にみうけられる。全体にカラージュ的に唄をはさむ構成で随

筆的な小説となっている。そのなかの「子守の唄」は、幼い日の作者の分身である民子が故郷によせる回想で、梓川村の四季のエピソードを記す。したがってこれも「山の幸」に類似するが、英子は一時期収入のために少女小説を手がけた経験も反映してか、表現がいっそうソフトになっている。

揺れる馬車の中で、民子は買って来た雑誌を、夢中で読み出した。大人たちのお喋りなど耳に入らず、気がついたら、日暮になっていて、活字がよく読めなくなっていた。

その少女雑誌は、民子が読み終ってから、一緒に学校へ行っていた、三人の同級生にも貸してやった。みんなは何度も奪いあうようにして、すっかり暗記するまで読み、通学の行き戻りに、小説の中の、あわれな主人公の身の上へ、どれだけ同情の涙を流したことが。わけても民子は、その雑誌の中であって、美しい歌詞の子守唄が好きで、暇さえあれば、節をつけてうたってみた。

ねんねんころころ浜の石

ころころころんでどこへ行く

波にもまれて淡路島

通りちどりの島へ行く……

うたいながら民子は、どこへ行ったからわからない、弟の子守たちのことが頭に浮んで、彼女たちに、この上品な子守唄を、教えてやりたいと思うのだった。世の中には、こんな美しい子守唄も、あると知ったら、おすみはどんな顔をして、何と

いうだろうか。

別の一篇「山の神様」は上高地の住人だった上条嘉門次がモデルで、民子の小学生時代の心象風景を、やはり唄を挿入して描く。このようにエッセイ風に回想して小説化している点につき「あとがき」でいう。「先頃ヨーロッパの旅から戻られた、親しくしている独逸文学者が、この作品を読まれて「柳田国男さんの、民俗学みたいな小説ですね」と、好評して下さいましたが、私はその時、これまで全く気づかなかった、自分の体質のようなものを、他人に教えられて、はっと思うと共に、現代の日本のインテリが、忘れかけている、明治大正へかけての、庶民の生活感情が、この作品の中に出ている」云々。

以上のように作品は常民としての生活感情を反映させた随筆風の小説に傾斜して、本格的な全体小説からは遠のいた。その延長線上に刊行されたのがエッセイ集『高原にも雀が』（一九七五）と『マロニエと梅の花』（一九九一）である。米寿に出した、佐藤春夫の未亡人から届けられたマロニエの樹にちなむエッセイ集のなかの「ブラジルからの便り」は、晩年に英子が主宰した俳句文芸誌「鈴」からの転載という。（室賀敦朗「信州の旅」一一七号「ブラジルからの便り」）

これは『夜明けの風』の中的一篇「別離の日」に端を発する。この作品は作者と同郷の少年が、移民のため村を離れる場面を回想して描いた作で、石川達三「蒼氓」のような長編ではむろんないが、このモデルが健在でブラジルで大農場を経営しているという報が作者に届き、小説の効果反響にびっくりした感動を記したエッセイである。

こうしたエッセイ集を出したところで、英子が回顧する文学人生の感慨を、再び岡田孝子の聞き書きでみると次のようだ。「——いろいろありましたが、私としてはけっこう自分の好きなようにやってきたと思うんですよ。芸術選奨新人賞も埼玉文化賞も七〇歳を越えての受賞で、自分でも戸惑いましたけど、少しずつでも自分の書きたいことを書いてきた、そのお蔭だと思っんですよ。」

夫婦が作家というのは、基本的には難しいと思いますよ。とくに私たちの時代は女が小説を書くということ自体が、嫌がられてましたからね。（中略）本当に書きたいなら夫も子供も捨てて、書けばいい、と言われたことがあって。そのとき、私は、妻としても、母親としても役割を果たしたうえで、なお、小説を書きたいのだと、泣きながら言ったことがあるんです。でも、これって傲慢ですよ。どこかで自分の血を流さなければ、作家としてはむずかしいんじゃないかしら。」

さて、冒頭の序で、文学と実生活の問題などと、おおげさなモチーフを示した関係で、平林英子の回顧にひかれて私見の一端を記したい。明治期「こわれ指輪」を発表した清水紫琴は、古在由直と結婚するに際し、たしか小説執筆をしないという要望に悩まされたように記憶する。時代は流れても、破滅型になろうとも自分の血を流してでも文学に殉じるか、調和型に文学と生活を両立させるかといった問題は続いているように思う。ランボーや二葉亭四迷のように、文学など必要以上にこだわらずに生きる場合は別として。

男のエゴイズム時代に拮抗して、「青鞥」の、らいてうや尾竹紅吉などが活躍し、岡本かの子一平夫妻や瀬戸内晴美がジャーナリズムにのって女性の進路を示すにおよんで、一筋に一足のワラジで進

むか、二足で進むかの問題は、内助の功が死語となるような問題ではない問題なのかもしれない。

それでも平山郁夫の場合のように、女性が絵筆を折る内助の功もあるのだし、三岸節子・好太郎夫妻や丸木俊子・位里夫妻など美術界に例をとっても様々だ。音楽や演劇の世界でも同様だろう。つまり表現するにせよ享受の側に立つにせよ、文化生活はとどのつまり、人生観にそって様々な進路をとるにしくはない、という平凡な常識論におち入るのだが、私としては平林英子のような、いかにも信州人気質といった堅実な生き方を評価するものだ。